

# 絵師高田敬輔とその作品（その三）

——「無量寿経曼荼羅」の三輩往生段について——

林 竹 人

## 〔抄 録〕

絵師高田敬輔は、浄土宗の根本聖典である『選択本願念仏集』に基づいて「選択集十六章之図」、『無量寿経』について「無量寿経曼荼羅」をそれぞれ描き、近世浄土宗典籍研究第一人者の良照義山の賞讃を得た。そこで、この両曼荼羅に共通の絵相である三輩往生段に着目し、どのような意図のもとに描かれたのか、その典拠である『無量寿経』『観無量寿経』『選択本願念仏集』とどのような整合性をもつか考察する。加えて良照義山の『無量寿経随聞講録』、さらに随天の『大経曼荼羅開壇記』を参照し、三輩往生段について検証する。

キーワード 選択集十六章之図、無量寿経曼荼羅、三輩往生、九品往生、念仏と余行

## 第一章 はじめに

江州日野郷（滋賀県日野町）の絵師法眼高田敬輔（延宝二年へ一六七四）〜宝暦五年へ一七五五）は、近世浄土宗典籍研究第一人者の良照義山（正保四年へ一六四七）〜享保二年へ一七一七）の教授の下に、浄土宗の根本聖典である『選択本願念仏集』に基づいて「選択集十六章之図」（正徳三年へ一七一三）『資料①』を描き、そして『無量寿経』については「無量寿経曼荼羅」（正徳四年へ一七一四）『資料②』をそれぞれ描いている。今回は、「無量寿経曼荼羅」の四縁部分の中でも上縁の三輩往生段に着目し、どのような意図のもとに描かれたのか、考察を加えることにする。尚、この「無量寿経曼荼羅」の三輩往生段は、「選択集十六章之図」の《第四 三輩念佛往生章》と絵相が共通していることから、『資料③』に示すように両曼荼羅を比較するとともに、「無量寿経曼荼羅」を注釈した随天の『大経曼荼羅開壇記』に基づいて絵相を精査する。そして、さらに、高田敬輔が師と仰ぐ良照義山がどのような三輩往生観をもっていたのか、その著『無量寿経随聞講録』も参照しながら、三輩往生段を検証する。

《資料①高田敬輔「選択集十六章之図」紙本摺印着色 へ二五・八×五一・五〉林個人蔵》



《資料②高田敬輔「無量寿経曼荼羅」紙本摺印着色 へ一五三・二×六九・〇〉林個人蔵》



## 第二章 問題の所在

### 第一節 「無量寿経曼荼羅」と「選択集十六章之図」の三輩往生段の対比

#### 《資料③》「無量寿経曼荼羅」と「選択集十六章之図」の三輩往生段の対比

高田敬輔「無量寿経曼荼羅」

随天『大經曼荼羅開境記』卷三 二十七丁 《太字・書き下し文は筆者》

#### 上輩往生

標文 捨家棄欲而作沙門發菩提心

此等衆生臨壽終時無量壽佛與諸大衆現其人前

上方右二重殿上重開戸下重一僧向一左展具机上繡經焚香供養合掌稱名臨命終時紫雲瓊瓊聖衆來迎彌陀定印坐蓮向右放一大光明照行者頂一五五菩薩側一塞雲中一觀音持一金蓮臺一勢至合掌右三菩薩其一持一蓋其二執一幡其三合掌左三菩薩皆俱合掌後十七菩薩二菩薩合掌其餘印隱上三立化佛三宮殿三番樹一雨華

上方の右に二重の殿あり。上重は戸を開す。下重に一僧左に向きて展具し、机上に經を繡き、焚香供養して合掌稱名す。命終の時に臨みて紫雲瓊瓊として聖衆來迎す。彌陀、定印、蓮に坐し、右に向き、大光明を放ち、行者の頂を照らす。五五の菩薩、雲中に側塞す。觀音は金蓮臺を持し、勢至は合掌す。右に三菩薩。其の一は蓋を持ち、其の二は幡を執り、其の三は合掌す。左に三菩薩あり。皆俱に合掌す。後ろに十七菩薩あり。二菩薩は合掌、其餘は印隱る。上に三の立化佛と三宮殿と三番樹と一つの雨華あり。

#### 中輩往生

標文 起立塔像飯食沙門懸繡燃燈散華燒香

殿内一僧昇坐乘二如意一向一優婆夷向一右合掌一侍女向一左合掌優婆夷終焉迎相彌陀定印坐蓮來現左右七菩薩侍立左三其一持蓮其二捧蓋右四其一二三合掌其四印隱

殿内一僧昇坐乘二如意一向一優婆夷向一右合掌一侍女向一左合掌優婆夷終焉迎相彌陀定印坐蓮來現左右七菩薩侍立左三其一持蓮其二捧蓋右四其一二三合掌其四印隱

#### 下輩往生

標文 此人隨終夢見彼佛

宅内壇上掛一畫像焚香供養主人病牀合掌而眠枕上一僧鳴磬念佛側一僧右手取念珠一左手内収一婦人下坐奉湯藥三尊乘雲立振即現宛如夢見彌陀坐蓮舉右手結空風左手低同空風觀音持蓮勢至合掌

宅内の壇上に一畫像を掛け、焚香供養す。主人病牀に合掌し、眠る。枕上に一僧あり。磬を鳴らし念佛す。側に一僧あり。右手に念珠を取り、左手内に収む。一婦人下坐にして湯藥を奉ず。三尊雲に乗じ、立振して即ち現れたまふ。宛として夢見の如く。彌陀蓮に坐し、右手を挙げ、空風を結ぶ。左手低くして同じく空風。觀音、蓮を持ち、勢至、掌を合わす。

高田敬輔「選擇集十六章之圖」



「無量寿経曼荼羅」と「選択集十六章之図」の共通絵相である三輩往生段を対比するとともに、随天の『大経曼荼羅開壇記』の三輩往生段に関わる記述をみると右図《資料③》のようになっていいる。これをさらにまとめると、次の表のようになる。

● 「無量寿経曼荼羅」三輩往生段と「選択集十六章之図」《第四 三輩念佛往生章》の比較

「無量寿経曼荼羅」三輩往生段	「選択集十六章之図」《第四 三輩往生章》
<p>全体</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各往生の絵相に、標文の記述あり。</li> <li>上輩往生、中輩往生、下輩往生、それぞれの区画あり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>章標《第四 三輩念佛往生章》のみ記述。</li> <li>三輩往生それぞれを一つの絵相に描く。</li> </ul>
<p>上輩往生</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>二重殿の下重の境内で合掌称念の一僧。</li> <li>観音の金蓮台、蓋、幡を持す二菩薩以外、他の菩薩の持物見えず。</li> <li>他に三体の立化佛、三つの宮殿、一つの雨華、四本の寶樹（※『大経曼荼羅開壇記』には、三寶樹とあるが、絵相には四本の寶樹あり。）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>殿なし。坐具上で合掌称念の一僧。</li> <li>二十五菩薩、樂器等の持物あり。他に九体の立化仏。</li> <li>宮殿、寶樹、雨華の表現なし。</li> </ul>
<p>中輩往生</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>優婆夷の終焉の迎相。如意を秉る一僧。脇に一侍女。</li> <li>弥陀、七菩薩を図し、捧持齋戒。</li> <li>飯食沙門の絵相、優婆塞、器盂を持す。</li> <li>浮圖を図し、起立塔像。</li> <li>繒を懸け、燈を燃じ、散華焼香。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>阿弥陀仏の前で優婆塞、合掌称念。</li> <li>弥陀、觀音、勢至。後に三菩薩。脇に五体の立化仏。</li> <li>飯食沙門の絵相なし。</li> <li>一浮圖のみ。</li> <li>繒を懸け、燈を燃じ、散華焼香。</li> </ul>
<p>下輩往生</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>宅内壇上に掛幅、焚香。</li> <li>一僧、磬を鳴らし念仏。側に一僧、念珠を執る。一婦人、下座で湯薬を奉ず。</li> <li>阿弥陀三尊、立撮即現して迎接。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宅内、掛幅なし。</li> <li>枕上に一僧、如意を秉る。</li> <li>阿弥陀三尊、立撮即現して迎接。</li> </ul>



## 第二節 「無量壽経曼荼羅」三輩往生段の特色

前項で明らかかなように、「無量壽経曼荼羅」三輩往生段の大きな特色の一つは、上輩往生、中輩往生、下輩往生それぞれが、一区画ずつに仕切られた往生相で描かれ、そして、その往生相の中に、標文が記されていることである。ちなみに「選択集十六章之図」は、章の題である章標しか記されず、絵相の細部を説明する標文は一切無い。

その往生相に記される標文は、左記のようになっている。

### ●上輩往生 ・捨家棄欲而作沙門發菩提心

●此等衆生臨へ※原版は臣偏ではなく月偏へ壽終時無量壽佛与諸大衆現其人前

### ●中輩往生 ・起立塔像

・飯食沙門

・懸繒燃燈

・散華焼香

### ●下輩往生 ・此人臨終夢見彼佛

この標文に再び着目すると、

- ・捨家棄欲…家を捨て、欲を棄て、
- ・而作沙門…沙門（出家者）に作り、
- ・發菩提心…菩提心を發す。
- ・起立塔像…堂塔を建て、仏像を造る。
- ・飯食沙門…沙門（出家者）に食事を捧げ、
- ・懸繒燃燈…繒かとりを懸け、燈を燃し、
- ・散華焼香…華を散らし、香を焼く。

とあり、この内容は、まさしく念仏往生行ではなく、いわゆる余行を記したものである。

この標文のままならば、上輩往生者は、《捨家棄欲》し、《而作沙門》になり、《發菩提心》することによって、《此等衆生》は、《臨壽終時》に《無量壽佛與諸大衆》が《現其人前》して往生し、中輩往生の者は、《起立塔像》し、《飯食沙門》して、《懸繒燃燈》、《散華焼香》することにより

往生する。さらに、下輩往生の者は、掛幅を懸け、香を焚き、僧の念仏により、《此人臨終夢見彼佛》することができるといことになる。

高田敬輔は、「無量寿経曼荼羅」三輩往生段に絵相を描き、右のような標文を記したことは、このような余行を行うことを「無量寿経曼荼羅」を観る者に望んだのだろうか、という大きな疑問が生じるのである。

### 第三章 考察

なぜ、高田敬輔は「無量寿経曼荼羅」三輩往生段に、諸々の余行を示す標文を記したのか、まず初めに『無量寿経』の三輩往生行を、そして次に、三輩往生行と最も関連する『観無量寿経』の九品往生行を、さらに、法然が『無量寿経』の三輩往生行と『観無量寿経』の九品往生行をどのように捉えて『選択本願念仏集』で説いているかを改めて読み直し、加えて高田敬輔の師と称される良照義山が『無量寿経随聞講録』でどのような三輩往生観をもっていたか、考察をすることにする。

#### 第一節 念仏往生行と余行往生行

##### 第一項 「三輩俱云念仏往生」とは

『無量寿経』<sup>(3)</sup>の上輩、中輩には「一向専念無量壽佛」、下輩には「一向専意乃至十念念無量壽佛」とそれぞれに念仏行が説かれているが、問題となるのは、その念仏行の前後に、

- ・上輩…捨<sub>レ</sub>家棄<sub>レ</sub>欲而作<sub>二</sub>沙門<sub>一</sub>發<sub>二</sub>菩提心<sub>一</sub>
- ・中輩…多少修<sub>レ</sub>善奉<sub>二</sub>持齋戒<sub>一</sub>起<sub>二</sub>立塔像<sub>一</sub>飯<sub>二</sub>食沙門<sub>一</sub>懸<sub>レ</sub>繒然<sub>レ</sub>燈散<sub>レ</sub>華焼<sub>レ</sub>香
- ・下輩…發<sub>二</sub>無上菩提之心<sub>一</sub>

と念仏行とは異なる余行が説かれていることである。

一方の『観無量寿経』<sup>(4)</sup>の九品往生はどうだろうか。

- ・上品上生…一者慈心不<sub>レ</sub>殺具<sub>二</sub>諸戒行<sub>一</sub>二者讀<sub>二</sub>誦大乘方等經典<sub>一</sub>三者修<sub>二</sub>行六念<sub>一</sub>
- ・上品中生…善解<sub>二</sub>義趣<sub>一</sub>於<sub>二</sub>第一義<sub>一</sub>心不<sub>レ</sub>驚動<sub>二</sub>深信<sub>一</sub>因果<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>謗<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>
- ・上品下生…信<sub>二</sub>因果<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>謗<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>但發<sub>二</sub>無上道心<sub>一</sub>
- ・中品上生…受<sub>二</sub>持五戒<sub>一</sub>持<sub>二</sub>八戒齋<sub>一</sub>修<sub>二</sub>行諸戒<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>五逆<sub>一</sub>無<sub>二</sub>衆過患<sub>一</sub>

- ・中品中生…若一日一夜受持八戒齋<sup>二</sup>若一日一夜持沙彌戒<sup>三</sup>若一日一夜持具足戒<sup>四</sup>威儀無<sup>レ</sup>缺
- ・中品下生…孝養父母行世仁慈<sup>一</sup>

とあるように、上品の上生、中生、下生、中品の上生、中生、下生の六品は、いずれも種々の戒を受持したり、經典を誦誦したり、六念を修行したり、父母に孝養したり、世の仁愛を行じたりと、念佛行とは異なる余行が説かれているのである。

ただし、下品の上生、中生、下生の三品は、「遇善知識」とあるように、善知識と遇い、

- ・下品上生…遇善知識爲讀大乘十二部經首題名字<sup>一</sup>以聞<sup>二</sup>如是諸經名<sup>三</sup>故除<sup>四</sup>卻千劫極重惡業<sup>五</sup>智者復教合掌叉手稱南無阿彌陀佛<sup>六</sup>

- ・下品中生…遇善知識以<sup>一</sup>大慈悲<sup>二</sup>爲説阿彌陀佛十力威徳<sup>三</sup>廣説<sup>四</sup>彼佛光明神力<sup>五</sup>亦讀<sup>六</sup>戒定慧解脱解脱知見<sup>七</sup>

- ・下品下生…遇善知識種種安慰爲説妙法<sup>一</sup>教令念佛<sup>二</sup>此人苦逼不<sup>レ</sup>違念佛<sup>三</sup>善友告言汝若不<sup>レ</sup>能念者應稱無量壽佛<sup>四</sup>如是至心令<sup>五</sup>聲不<sup>レ</sup>絶具<sup>六</sup>

足十念<sup>一</sup>稱南無阿彌陀佛<sup>二</sup>

と「稱南無阿彌陀佛」することにより、まさに念仏往生を行ずることになるのである。

このようにみえてくると、『無量寿経』の三輩往生行には、いずれも念仏往生を説きながら余行が付加されていること、また、『観無量寿経』の九品往生行は、上品、中品の六品には余行が説かれ、下品に念仏往生行が説かれているのである。

そこで新たな疑問として、なぜ三輩往生を説きながら、『無量寿経』と『観無量寿経』の教えに違いが生じるかという点である。

その疑問に、明快な回答を与えてくれるのが、法然の『選択本願念仏集』である。

『選択本願念仏集』の十六章中、三輩往生を説くのが、「第四 三輩念仏往生之文」である。この章は、引用文が「無量寿経下云」から始まり、『無量寿経』の三輩往生がそのまま引用された後、私釈段が説かれる構成になっている。

その法然の私釈段を検討すると、私釈段の初めに、

私問曰上輩文中念佛之外亦有捨家棄欲等餘行<sup>一</sup>中輩文中亦有起立塔像等餘行<sup>二</sup>下輩文中亦有菩提心等餘行<sup>三</sup>何故唯云念佛往生<sup>四</sup>乎答曰善導和尚觀念法門云又此經下卷初云佛説一切衆生根性不同有上中下<sup>五</sup>随其根性<sup>六</sup>佛皆勸專念<sup>七</sup>無量壽佛名<sup>八</sup>其人命欲終時佛與聖衆<sup>九</sup>自來迎接盡得往生<sup>一〇</sup>此亦是生<sup>一一</sup>依此釋意<sup>一二</sup>三輩俱云念佛往生<sup>一三</sup>也

とあり、上輩に「念佛の外に亦捨家棄欲等の餘行有り」、中輩に「亦起立塔像等の餘行有り」、下輩に「亦菩提心等の餘行有り」と、それぞれに余行があるのになぜ唯念仏往生というのかという問いに対して、その答えに善導の『観念法門』の攝生増上縁を引き、

又此經下卷初云佛説一切衆生根性不同有上中下<sup>一</sup>随其根性<sup>二</sup>佛皆勸專念<sup>三</sup>無量壽佛名<sup>四</sup>其人命欲終時佛與聖衆<sup>五</sup>自來迎接盡得往生<sup>六</sup>此亦是

### 攝生増上縁

と、一般衆生には、生まれつきの性質や氣力は同じではなく、上中下と分けられるが、いずれの者にも、その根性に随つて、仏は皆に無量寿仏の名を専ら念ずるよう勧めているのであり、そうすれば、

其人命欲終時佛與聖衆自來迎接盡得往生<sup>⑧</sup>

その念じた人が命終の時に、仏が聖衆と俱に自ら來迎して、迎接し、尽く淨土に往生させてくれる、というのである。<sup>⑨</sup>だから、

依此釋意三輩俱云念佛往生也

にあるように、法然は、この善導の釈した文を根拠にすれば、三輩俱に念佛往生と云うのである、と説いている。

### 第二項 「九品之行唯在念佛」とは

ところが、もう一点、どうして念仏往生行を勧めるのであれば、わざわざ余行を説く必要があるのか、そしてまた、その余行を説くにもかかわらず、棄てるという点はまだ説明されていないのである。

そこで、どうして余行を棄てて念仏というのか、という問いを<sup>⑩</sup>発している。

問曰此釋未遮前難何棄餘行唯云念佛乎

それに答えるように、<sup>⑪</sup>

答曰此有三意一爲下廢諸行歸於念佛而說諸行也二爲助成念佛而說諸行也三約念佛諸行二門各爲立三品而說諸行也  
と、三つの意があり、その一つは諸行を廢して念仏に歸すためであり、二つ目は念仏を助成するためであり、そして三つ目は念仏や諸行に、それぞれ三品を立てるためであると説いている。そして、それぞれについてさらに詳しく、

一爲下廢諸行歸於念佛而說諸行者準云善導觀經疏中上來雖說定散兩門之益望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名之釋意且解之者上輩之中雖說菩提心等餘行望上本願意唯在衆生專稱彌陀名而本願中更無餘行三輩俱依上本願故云一向專念無量壽佛也

### 〈中略〉

今此經中一向亦然若念佛外亦加餘行即非一向若準寺者可云兼行既云一向不兼餘明矣雖先說餘行後云一向專念明知廢諸行唯用念佛故云一向若不<sup>⑫</sup>然者一向之言最以<sup>⑬</sup>消歟



とあるように、初めの諸行を廃して念仏に帰せんがために諸行を説くというのは、善導が『觀經疏』<sup>12</sup>の中でいうように、定散兩門に益があるというものの、仏の本願にてらしてみれば「意在衆生一向專稱彌陀佛名」に他ならないのである。しかも、一向というのは余を兼ねないから一向なのであって、もし念仏の外に余行を加えれば一向ではなく兼行になる。だから、先に余行を説いても、後で一向專念と云っているの、明らかに諸行を廃して、唯、念仏を用いるということなのである、このようなことから一向の文字は消しがたい、と述べている。

そして、さらに二つ目の念仏を助成せんがために、此の諸行を説くというのには、二つの意があり、

二爲<sub>レ</sub>助<sub>二</sub>成念佛<sub>一</sub>說<sub>二</sub>此諸行<sub>一</sub>者此亦有<sub>二</sub>二意<sub>一</sub>一以<sub>二</sub>同類善根<sub>一</sub>助<sub>二</sub>成念佛<sub>一</sub>二以<sub>二</sub>異類善根<sub>一</sub>助<sub>二</sub>成念佛<sub>一</sub>

その一つは同類の善根を以てて念仏を助成するものと、もう一つは異類の善根を以てて念仏を助成するものがあるというのである。

初同類助成者善導和尚觀經疏中學<sub>二</sub>五種助行<sub>一</sub>助<sub>二</sub>成念佛一行<sub>一</sub>是也具如<sub>二</sub>上正雜二行之中說<sub>一</sub>次異類助成者先就<sub>二</sub>上輩<sub>一</sub>而論<sub>二</sub>正助<sub>一</sub>者一向專念無量壽佛者是正行也亦是所助也捨家棄欲而作沙門發菩提心等者是助行也亦是能助也謂往生之業念佛爲<sub>レ</sub>本故爲<sub>二</sub>一向修<sub>二</sub>念佛<sub>一</sub>捨<sub>レ</sub>家棄<sub>レ</sub>欲而作<sub>二</sub>沙門<sub>一</sub>又發<sub>二</sub>菩提心<sub>一</sub>等也就<sub>レ</sub>中出家發心等者且指<sub>二</sub>初出及以初發<sub>一</sub>念佛是長時不退之行寧容<sub>レ</sub>妨<sub>二</sub>礙念佛<sub>一</sub>也中輩之中亦有<sub>二</sub>起立塔像懸繒燃燈散華燒香等諸行<sub>一</sub>是則助<sub>二</sub>成念佛<sub>一</sub>也其旨見<sub>二</sub>往生要集<sub>一</sub>謂助念方法中方處供具等是也下輩之中亦有<sub>二</sub>發心<sub>一</sub>亦有<sub>二</sub>念佛<sub>一</sub>助正之義準<sub>レ</sub>前可<sub>レ</sub>知

その初めの同類の助成というのは、善導の『觀經疏』<sup>13</sup>に五種の助行を挙げているように、念佛の一行を助成するものである。

そして、次に異類の助成というのは、先ず上輩についていえば、一向專念無量壽佛とは、正行であり、助成されるものである。捨家棄欲、而作沙門、發菩提心等というのは、これは助行であり、能く念仏を助けるものである。だから往生の業というのは、念仏を根本とするものであって、一向に念仏を修するために、家を捨て、欲を棄て、沙門となるものであり、また、菩提心を発することになるのである。その中でも出家發心等というのは、初めの頃の念仏を修するための發心であるのに対し、念仏は、生涯に亘って長時不退に修すものであるから、このような諸行は念仏を妨げるようなものではないと述べている。

そして、中輩の中に、また起立塔像懸繒然燈散華燒香等の諸行があげられているが、これも念仏を助成するものであり、その趣旨については、『往生要集』の助念方法<sup>14</sup>の中の方處供具等に詳しく説かれているというのである。

また、下輩の中に、菩提心を発すことと、念仏が説かれているが、念仏を助正することについては、右の上輩、中輩に従って知ることができるであろうと説いている。

さらに三つ目の、念仏諸行に約して、おのおの三品を立てんがために諸行を説く、というのは、

三約<sub>二</sub>念佛諸行<sub>一</sub>各爲<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>三品<sub>一</sub>而說<sub>二</sub>諸行<sub>一</sub>者先約<sub>二</sub>念佛<sub>一</sub>立<sub>二</sub>三品<sub>一</sub>者謂此三輩中通皆云<sub>二</sub>一向專念無量壽佛<sub>一</sub>是則約<sub>二</sub>念佛門<sub>一</sub>立<sub>二</sub>其三品<sub>一</sub>也故往生

要集念佛證據門云雙卷經三輩之業雖有淺深然通皆云一向專念無量壽佛感師之是則約諸行立其三品也故往生要集諸行往生門云雙卷經三輩亦不出此已上 次約諸行門立三品者謂此三輩中通皆有菩提心等諸行

まず、念佛について三品を立てるのは、三輩を通じて皆一向專念無量壽佛とあることから、念仏にも三種あることを示したもので、『往生要集』の念佛證據門が示すように、『無量壽經』の三輩の行業にも浅深があり、しかも、皆、一向專念無量壽佛と云うところからも明らかであると説いている。そして、懷感師も『釋淨土群疑論』<sup>⑥</sup>で、これと同じことを述べていると記している。

次に諸行についても三品が立てられているのは、三輩を通して、皆、菩提心等の諸行があげられていることから三種の諸行があることを示すものであり、これも『往生要集』の諸行往生門に『無量壽經』の三輩が引かれていることから明らかであるとしている。

そして、

凡如<sub>レ</sub>此三義雖有<sub>二</sub>不同俱是所<sub>レ</sub>以爲一向念佛也初義卽是爲廢立而說謂諸行爲廢而說念佛爲立而說次義卽是爲助正而說謂爲助念佛之正業而說諸行之助業後義卽是爲傍正而說謂雖說念佛諸行二門以念佛而爲正以諸行而爲傍故云三輩通皆念佛也但此等三義殿最難知請諸學者取捨在心今若依善導以初爲正耳

このように三義に不同があるものの、俱に是れは一向念佛の為のものなのである。

初めの義は、廢立の為に説くもので、諸行は廢の為に、念佛は立の為に説くのである。

次の義は、助正の為に説くもので、念佛の正業を助ける為に諸行の助業を説くのである。

後の義は、傍正の為に説くもので、念佛と諸行の二門を説くのであるが、念佛を以て正とし、諸行を以て傍とするものである。

だから、三輩を通じて、皆、念佛ということになる。ただし、この三義については、殿最（どれが先でどれが後か）勝劣をつけ難いもので、学ぶ者は良く仏の意を得て取捨して欲しいものである。今は、善導の教えに基づくならば、初めの義を以て正とするものであると述べている。

そしてさらに、三輩については一向念仏であることが明らかになったが、九品の念仏についてはどうなのか、ということについて、次のような問いかけをしている。

問曰三輩之業皆云念佛其義可然但觀經九品與壽經三輩本是開合異也若爾者何壽經三輩之中皆云念佛至觀經九品上中二品不說念佛而至下品始說念佛也答曰此有二義一如問端云雙卷三輩觀經九品開合異者以此應知九品中皆可<sub>レ</sub>有念佛云何得<sub>レ</sub>知三輩之中皆有念佛九品之中何無念佛乎故往生要集云問念佛之行於九品中是何品攝答若如說行理當上上一如是隨其勝劣應<sub>レ</sub>分九品然經所說九品行

業是示<sub>二</sub>一端<sub>一</sub>理實無量<sub>上</sub>已 故知念佛亦可<sub>レ</sub>通<sub>二</sub>九品<sub>一</sub>二觀經之意初廣說<sub>二</sub>定散之行<sub>一</sub>普逗<sub>二</sub>衆機<sub>一</sub>後廢<sub>二</sub>定散二善<sub>一</sub>歸<sub>二</sub>念佛一行<sub>一</sub>所謂汝好持是語等之文是也其義如<sub>二</sub>下具述<sub>一</sub>故知九品之行唯在<sub>二</sub>念佛<sub>一</sub>矣

ここでは、三輩の業は、皆、念佛であり、『觀無量壽經』の九品と、『無量壽經』の三輩とは開合の異であることが明らかになったが、どうして、三輩には、皆、念仏と云い、『觀無量壽經』の九品では、上品、中品に念仏が説かれず、下品だけに念仏が説かれるのかと、さらに問ひかけがされている。

それに答えて、ここには二つの意義があるとしている。

その一つは、右に云うように、『無量壽經』の三輩と『觀無量壽經』の九品とは、開合の異であるので、三輩の中に、皆、念仏があることから、九品の中にも、皆、念仏がなければならないということである。

だから『往生要集』<sup>18)</sup>には、

問念佛之行於<sub>二</sub>九品中<sub>一</sub>是何品攝答若如<sub>レ</sub>說行理當<sub>二</sub>上上<sub>一</sub>如是隨<sub>二</sub>其勝劣<sub>一</sub>應<sub>レ</sub>分<sub>二</sub>九品<sub>一</sub>然經所<sub>レ</sub>說九品行業是示<sub>二</sub>一端<sub>一</sub>理實無量

とあるように、念仏行は九品のいずれの品に攝まれるものであるのかという問いに對し、もし經に説かれるように行すれば、当然のこととして上品上生であるが、一般の衆生には勝劣があり、それに随つて九品に分け、その一端を示したに過ぎない。実際には九品に納まらず分類も無数にある、と述べられていることから、念仏は九品のいずれにも通ずるものであることを知ることができるのである。

二つ目に、『觀無量壽經』の意は、初めには広く定散の行を説いて、多くの機根の人々にあうように説き、後にはその二善を廃捨してただ念仏の一行に帰せしめるため<sup>19)</sup>、

汝好持<sub>二</sub>是語<sub>一</sub>持<sub>二</sub>是語<sub>一</sub>者即是持<sub>二</sub>無量壽佛名<sub>一</sub>

とあるように、『觀無量壽經』の結論というべき、仏が念仏の一行のみを、最後に、阿難に付属したことである。だから、九品の行は、唯、念仏にあることを知らねばならないと説かれているというのである。

このようなことについて、高田敬輔の師と仰がれる良照義山は、どのような解釈をしているのか、次にみることにする。

## 第二節 良照義山の三輩往生觀

義山は『無量壽經』の註釈を『無量壽經隨聞講錄』<sup>20)</sup>に著している。

その中で三輩往生について記しているのは、<sup>21)</sup>

凡有三輩等者第十九願之成就也上念佛餘行機就舉<sup>一</sup>一具<sup>一</sup>凡三輩爾三輩九品同異之義諸師不<sup>レ</sup>同鸞師嘉祥淨影法位龍興憬興源清此七家共存<sup>二</sup>同義<sup>一</sup>天台義叔孤山靈芝此四家並云<sup>二</sup>不同有<sup>二</sup>同不同<sup>一</sup>同義爲<sup>レ</sup>正鸞師略論云无量壽經中唯有<sup>二</sup>三輩上中下<sup>一</sup>无量壽觀經中一品又分爲<sup>二</sup>上中下<sup>一</sup>三三而九也合爲<sup>二</sup>九品<sup>一</sup>選擇云觀經九品與<sup>二</sup>壽經三輩<sup>一</sup>本是開合異然即三輩九品只是開合之異此元祖大師相傳也<sup>七家作<sup>レ</sup>圖示<sup>一</sup>之</sup>又<sup>二</sup>二藏義并卷五紙委釋<sup>一</sup>とあるように、義山は、三輩往生は四十八願の第十九、来迎引接願の成就であるという前提のもとに、『選択本願念仏集』に説かれているように『観無量寿經』の九品と『無量寿經』の三輩は、開合の異であるとし、このことは元祖法然上人の伝授したものであることを強調している。

そして、さらに、

扱三輩去行通<sup>二</sup>念佛及餘行<sup>一</sup>皆悉往生行也然念佛本願行餘行非本願行先法藏比丘淨土建立給事第十八願十方衆生誓所念佛衆生置處ナリ即是所<sup>二</sup>以念佛爲<sup>二</sup>正因<sup>一</sup>也雖<sup>レ</sup>然餘行者亦非<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>攝就<sup>レ</sup>之選擇集云念佛往生三輩篇<sup>一</sup>此約<sup>二</sup>二尊本意<sup>一</sup>如<sup>レ</sup>斯書給事也依<sup>二</sup>經文<sup>一</sup>望<sup>二</sup>機類<sup>一</sup>見<sup>レ</sup>之時念佛及餘行之三輩也此義可<sup>レ</sup>得意置<sup>二</sup>事也<sup>一</sup>

三輩の去行は、念仏についても余行についても往生行であることに変わりが無い。しかし、念仏は本願の行であり、余行は非本願の行である。なぜならば、仏が法藏比丘の時、淨土を建立することを第十八願に誓ったことが、念仏衆生の心の置き所となり、念仏こそが正因となっていることによると述べている。

ただし、そうは云うものの余行もまた摂しないわけではない。このことについて『選択集』には念仏往生三輩篇とあるが、これは二尊の本意を考慮に入れて書いたものであろう。經文によつて機類を考慮するならば、念仏にも余行にも三輩があると考えられるので、このことは心得ておくべきであろうと記している。

このことから、念仏ばかりか余行にも、その機類によつて三輩があることを説いていることがわかるのである。

そして、さらに、なぜ一向専念無量寿仏と云うかについては、

然念佛本願行故勸云<sup>二</sup>一向<sup>一</sup>一向者對<sup>二</sup>一向三向等<sup>一</sup>之言不<sup>レ</sup>兼<sup>レ</sup>餘之意也然三輩文中念佛外說<sup>二</sup>諸行業<sup>一</sup>何故唯云<sup>二</sup>念佛往生<sup>一</sup>乎就<sup>レ</sup>之有<sup>二</sup>廢立助正傍生三義<sup>一</sup>

念佛は本願の行であるので勧めて一向と云うのである。二向や三向等に対する言葉で、余の行業を兼ねないことをいうのである。

また、三輩の文の中に、念佛の外に諸々の行業を説いているが、どうしてただ念仏往生と云うのかという疑問については、廢立、助正、傍生の三義が有るからであると述べている。

そして、



一爲<sub>下</sub>廢<sub>中</sub>諸行<sub>上</sub>歸於念佛<sub>中</sub>說<sub>中</sub>諸行<sub>上</sub>也

〈中略〉

譬如物兩方並置吟<sub>中</sub>味是非得失<sub>中</sub>若不<sub>レ</sub>並則難<sub>レ</sub>顯<sub>中</sub>是非勝劣<sub>中</sub>故今念佛特置<sub>中</sub>一向之言<sub>中</sub>然則三輩一向流通付屬一合其意顯然也觀經流通亦此規轍二經相合其旨著明也

その第一の理由は、諸行を廢して念仏に歸すために諸行を説くものである。

譬えば、物を両方に並べ置いて、その是非得失を吟味するようなものである。もし、並べなければ、その是非勝劣を顯わすことは難しい。だから、念仏一つだけに一向の言を置くのである。三輩の一向流通を付属しているのは、その意図が顯かであるし、觀經の流通分もまたその通りである。二經ともに相い合して、その趣旨は著明なのである、と余行を説くのは廢立のために、念仏の一行を比較することによって際立たせるためであると説いている。

次に、

二爲<sub>レ</sub>助<sub>中</sub>成念佛<sub>中</sub>而說<sub>中</sub>諸行<sub>中</sub>其中今說<sub>中</sub>異類助業<sub>中</sub>也<sub>要集</sub>

第二の理由は、念仏を助成するために諸行を説くものであり、その中でも今は異類の助業を説くものであるとしている。  
さらに、

三約<sub>中</sub>念佛諸行二門<sub>中</sub>各<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>立<sub>中</sub>三品<sub>中</sub>而說<sub>中</sub>諸行<sub>中</sub>是約<sub>中</sub>兼<sub>中</sub>餘行<sub>中</sub>者明<sub>中</sub>往生<sub>中</sub>也謂所化衆生性習不同執法各異也是故如來隨<sub>中</sub>其性欲<sub>中</sub>廣說<sub>中</sub>諸行及念佛<sub>中</sub>其中念佛爲<sub>中</sub>經正意<sub>中</sub>故云<sub>中</sub>一向<sub>中</sub>自餘諸行非<sub>中</sub>經正意<sub>中</sub>是故不<sub>レ</sub>置<sub>中</sub>一向之言<sub>中</sub>也但此等三義取捨在<sub>中</sub>心今若依<sub>中</sub>善導<sub>中</sub>以<sub>レ</sub>初爲<sub>中</sub>正耳尚委如<sub>中</sub>選擇

第四章<sub>上</sub>上來漢語燈一卷三十五紙已下決疑鈔三卷卅紙大綱鈔中十一紙

とあるように、第三の理由は、念仏と諸行の二門について各々三品を立てるために諸行を説くものである。このことは余行を兼ねるものについて往生を説くもので、所化の衆生は性質が異なるため、執法もそれぞれ異なるものであるから、如來はその性欲に随って、広く諸行や念仏を説いたのである。

そして、念仏は經の正意であるから一向といい、自余の諸行は經の正意ではないので一向という言葉は用いないのである。ただしこれらの三義について、その取捨は、心に留め置くべきである。今、もし善導の言によれば、初めを以って正とするだけである、尚、委しくは選択集の第四章にある如し、と義山は述べているのである。

## 第四章 まとめ

「無量寿経曼荼羅」三輩往生段に、なぜ余行の絵相や標文を記し、「選択集十六章之図」には記されないかという疑問から、典拠となる『無量寿経』『観無量寿経』『選択本願念仏集』を取り上げ、さらに講説書の『無量寿経随聞講録』、そして曼荼羅の註釈書である『大経曼荼羅開壇記』を検証した結果、次のようなことが頭らかになった。

①「無量寿経曼荼羅」の三輩往生の絵相に余行が描かれ、その標文が記されているが、三輩のいずれにも「一向専念無量寿仏」と経文に説かれていることから、念仏の一行によるということ。

②『無量寿経』の三輩往生と『観無量寿経』の九品往生は、開合の異であること。また、念仏と余行を並べるのは、捨劣得勝し、廃立・助正・傍正するためであり、唯、念仏の一行に帰すためであること。

③『観無量寿経』に余行が説かれてはいるが、後に定散二善が廃され、付属されるのは念仏だけであるので、ただ念仏の一行にあるということ。

④また、良照義山は、右の『選択本願念仏集』の説示を踏襲した上で、三輩往生は四十八願の第十九、来迎引接願の成就であることを前提に、三輩と九品は開合の異であり、元祖法然上人の伝授したものであることを強調していること。

⑤さらに、三輩の去行は、念仏も余行も往生行であるが、念仏は本願の行であることから一向といい、余行は非本願の行であるので一向ではないこと。また、経文によれば、機類によって念仏にも余行にも三輩があると考えられるということ。

等をあげることができ、なぜ余行を描き、標文にも取り上げたかは、ただ一向に専ら阿弥陀仏の御名を称えることが往生行であることを強調するためであったと考えられる。

### 〔注〕

（１）随天『大経曼荼羅開壇記』卷三 二七丁表〜三八丁表（安永九年刊 京師書林 赤井長兵衛 澤田吉左右衛門）

（２）良照義山『無量寿経随聞講録』卷下之一（浄土宗全書第十四卷四〇二頁）

（３）『無量寿経』（浄土宗全書第一卷一九〜二〇頁）

①上輩往生行について

其上輩者捨「家棄」欲而作「沙門」發「菩提心」一向専念「無量壽佛」修「諸功德」願「生」彼國「

②中輩往生行について

其中輩者十方世界諸天人民其有至心願生彼國雖不能行作沙門大修功德當發無上菩提之心一向專念無量壽佛多少修善奉持齋戒起立塔像飯食沙門懸繒然燈散華燒香以此廻向願生彼國

③下輩往生行について

其下輩者十方世界諸天人民其有至心欲生彼國暇使不能作諸功德當發無上菩提之心一向專意乃至十念念無量壽佛願生其國

(4)『觀無量壽經』(淨土宗全書第一卷四六〇頁)《太字は本文に引用部分》

①上品上生往生行について

上品上生者若有衆生願生彼國者發三種心則便往生何等為三一者至誠心二者深心三者廻向發願心具三心者必生彼國復有三種衆生當得往生何等為三一者慈心不殺具諸戒行二者讀誦大乘方等經典三者修六念

②上品中生往生行について

上品中生者不必受持讀誦方等經典善解義趣於第一義心不驚動深信因果不謗大乘

③上品下生往生行について

上品下生者亦信因果不謗大乘但發無上道心

④中品上生往生行について

中品上生者若有衆生受持五戒持八戒齋修行諸戒不造五逆無衆過患

⑤中品中生往生行について

中品中生者若有衆生若一日一夜受持八戒齋若一日一夜持沙彌戒若一日一夜持具足戒威儀無缺

⑥中品下生往生行について

中品下生者若有善男子善女人孝養父母行世仁慈

⑦下品上生往生行について

下品上生者或有衆生作衆惡業雖不誹謗方等經典如此愚人多造衆惡無有慚愧命欲終時遇善知識為讚大乘十二部經首題名字以聞如是諸經名故除卻千劫極重惡業智者復教合掌叉手稱南無阿彌陀佛

⑧下品中生往生行について

下品中生者或有衆生毀犯五戒八戒及具足戒如此愚人偷僧祇物盜現前僧物不淨說法無有慚愧以諸惡業而自莊嚴如此罪人以惡業故應墮地獄命欲終時地獄衆火一時俱至遇善知識以大慈悲為說阿彌陀佛十力威德廣說彼佛光明神力亦讚戒定慧解脫解脫知見

⑨下品下生往生行について

下品下生者或有衆生作不善業五逆十惡具諸不善如此愚人以惡業故應墮惡道經歷多劫受苦無窮如此愚人臨命終時遇善知識種種安慰為說妙法教令念佛此人苦逼不遑念佛善友告言汝若不能念者應稱無量壽佛如是至心令聲不絕具足十念稱南無阿彌陀佛

(5)『重鑄選擇本願念佛集』卷本二九表三五丁裏(元禄九年刊沙門義山募刻嘉永二年再刻)

(6)前掲『選擇本願念佛集』卷本三〇丁裏

(7)善導『觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門』(觀念法門)一卷(淨土宗全書第四卷二三三頁)

又此經下卷初云佛說一切衆生根性不同有上中下隨其根性佛皆勸專念無量壽佛名其人命欲終時佛與聖衆自來迎接盡得往生此亦是攝生增上緣

- (8) 前掲『選擇本願念佛集』卷本三二丁表
- (9) 前掲『選擇本願念佛集』卷本三二丁表
- (10) 前掲『選擇本願念佛集』卷本三二丁表
- (11) 前掲『選擇本願念佛集』卷本三二丁表
- (12) 善導『觀經正宗分散善義』卷第四（浄土宗全書第二卷七一頁）
- (13) 善導『觀經正宗分散善義』卷第四（浄土宗全書第二卷五八頁）
- (14) 源信『往生要集』大文第五助念方法 第一方處供具（浄土宗全書第十五卷八八頁）
- (15) 源信『往生要集』大文第八念佛証據（浄土宗全書第十五卷一二九頁）  
二雙卷經三輩之業雖有淺深然通云一向專念無量壽佛
- (16) 懷感『釋浄土群疑論』卷第五（浄土宗全書第六卷七〇頁）  
无量壽經又言上中下輩行有淺深皆唯一向專念阿彌陀佛  
●石井教道『選擇集全講』二四四頁【註】（二）群疑論卷五（浄全六ノ六六）は、（浄全六ノ七〇）の誤り。
- (17) 源信『往生要集』大文第九往生諸行 第一諸經（浄土宗全書第十五卷一三二頁）  
雙卷經三輩之業亦不出此
- (18) 源信『往生要集』大文第十問答料簡 第四尋常念相（浄土宗全書第十五卷一四一頁）
- (19) 『觀無量壽經』（浄土宗全書第一卷五一頁）
- (20) 前掲『無量壽經隨聞講録』（浄土宗全書第十四卷二四八〜五三〇頁）
- (21) 前掲『無量壽經隨聞講録』卷下之一（浄土宗全書第十四卷四〇二頁）
- (22) 前掲『無量壽經隨聞講録』卷下之一（浄土宗全書第十四卷四〇二〜四〇三頁）
- (23) 前掲『無量壽經隨聞講録』卷下之一（浄土宗全書第十四卷四〇三頁）
- (24) 前掲『無量壽經隨聞講録』卷下之一（浄土宗全書第十四卷四〇三〜四〇四頁）
- (25) 前掲『無量壽經隨聞講録』卷下之一（浄土宗全書第十四卷四〇四頁）
- (26) 前掲『無量壽經隨聞講録』卷下之一（浄土宗全書第十四卷四〇四頁）

（はやし たけと 文学研究科仏教文化専攻博士後期課程）

（指導教員…松永 知海 教授）

二〇一五年九月二十四日受理